

真劍 野分 V S 不知火
一本勝負

遠野静

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

昔、艦これにハマっていた頃に書いたものが出てきたので供養のためにあげます。

説明しよう。

この鎮守府の陽炎型駆逐艦は、(主に陽炎おねーちゃんの過保護が原因で)後期陽炎型の姉妹達は改装前に必ず姉と個人演習を行い、それに勝利しないと改装許可がおりないのだ！

だから最近の陽炎型駆逐艦は改装レベルが高いのだ！姉のせいだな！

まあなんだかんだ姉達も手加減とかしてくるから、普通に改装もしてくれろぞ！演習の教官に選んだ相手が緩いか真面目か不器用かにもよるわけだな！

！
つまり緩い姉が相手なら錬度が低くても簡単に改装許可が下りたりもするわけだな

これは、そんな事情をよく知らないでうっかり

陽炎型改装演習『夜の蜃気楼』

難易度：ナイトメア

推奨レベル：90以上

対戦相手：不知火（Lv 99）

に挑んでしまった野分のお話だ！

ではファイトツ！

8 7 6 5 4 3 2 1

--	--	--	--	--	--	--	--

38 32 29 25 16 12 5 1

目
次

野分（今日は……。なぜか不知火姉さんに呼びだされて、演習をすることとなりました）

不知火「……ちゃんと模擬弾ですね。よし」

野分「あの。不知火姉さん。先に聞いておきたいことがあるのですが」

不知火「なんでしょうか」

野分「演習は私と不知火姉さんの二人だけ……。ですか？　あまりやらない形式だと思うのですが……」

不知火「そうね。艦隊戦は基本的に複数で行うもの。

仲間との連携、戦略的判断、視野の広さ、などが求められる。

けれど、そうした戦略は、遂行する人員に『確実に目の前の相手に攻撃を当てられる実力』があつてこそそのもの。

わかりますか？」

野分「……いいたいことは分かります。作戦が正しくとも、それを遂行する個々人の錬度が低ければ、結局は失敗に終わると……。ああ」

不知火「はい。戦略的判断が正しくとも、全員が攻撃を外せば、何の意味もない」

不知火「特に、我々は駆逐艦。砲撃を潜り抜けて敵の懐に飛び込むことが役目です」

不知火「あるいは、潜り抜けてきた敵駆逐艦の排除も仕事ですが……。それもやはり距離は酷く近い」

不知火「そういう意味では、我々はもつとも危険な任務に就いているわ」

不知火「当然そうした状況では、全体を見た戦略的判断よりも、目の前の敵と1対1で戦う極地戦闘の意味合いがより強くなっていく。……。だから」

野分「……わかりました。あくまでも私自体の錬度。戦略ではなく戦術的な、砲撃・回避の技量を見る。ということですね」

不知火「そういうことです。……戦略や連携については陽炎の方が得意なのですが。

申し訳ありません。不知火は、目の前の敵を殲滅する方が得意ですので」

不知火「あなたに教えられることも、このくらいしかなくて」

野分「……いいえ、助かります。艦隊戦が仲間と共に戦うもの……とはいえ、『私自身が弱くてもいい』というわけではない」

野分「指導していただけるといふなら、願ったりかなったりです」

不知火「そう。そうね。その方が、貴女も舞風を助けることもできるでしょうしね？」

野分「そ、それは今は関係ないでしょう……。それにしても、どうして急に？」

不知火「ふむ野分。演習の前に一つ聞いておきたいことがあります。

あなたは、この演習がどんな意図を持って行われるか知っていますか？」

野分「いえ。……不知火姉さんも教えてくれなかつたじゃないですか」

不知火「まあ、そうですね。先入観はない方が良いと思つたので」

不知火「貴女の錬度も高くなりました。

そこで、恐らく次の会議の後、貴女の改装許可が下りるでしょう」

野分「本当ですか!？」

不知火「はい。貴女の艦装も改装されます。……けれどその前に。

私達、陽炎型姉妹の改装錬度が、後期になるにつれて、高くなつていくことは知つて

いますね？」

野分「? ええ、まあ……理由は知らないのですが」

不知火「その理由、実は我々のせいなのです」

野分「はい……?？」

不知火「改装錬度が一定に達した後期陽炎型に関しては、陽炎、不知火、黒潮、初風、雪風、天津風、時津風のうち1名と演習を行い、一本を取つたものには改装許可を与えらる」

野分「……!?!」

野分（ちよつと待つてください。ただでさえ高錬度……かつ、改装済みの姉さんたちを倒せと……!?!）

不知火「そんなに驚かなくてもいいでしょうに。……もちろん、陽炎や黒潮はしっかりと手加減をします。

これはあくまで改装錬度に達したかどうかを見極めるためですから。まさか本気で倒せなんていいません——不知火以外は」

野分「なんだ……え？　今、最後——」

——耳鳴りがした。

そう思った時には、背後の海面が音を立てて水柱をあげていた。

野分は振り返ることもなく、目の前の姉の姿——艤装を展開し、肩の艤装から煙を上げている姿を凝視した。

野分「えつと……姉さん。今のは？」

不知火「前にも言いましたが、不知火は不器用ですから。……手加減、というのが上手いかわなくて。ええ、私を演習相手に選んだ子達は、全員更に高錬度になってからやり直すか、別の姉に向かったか、してしまいました」

野分「姉さん……？ マジですか？」

不知火「マジです。……大丈夫、ハンデはあげましょう。駆逐艦の真価は近接しての雷撃——および更に追撃して超近距離——装甲が意味を成さなくなる距離での打ち合いです。つまり夜戦のことですが」

不知火「ですので……。私は基本、雷撃以外の無用な砲撃はしないことにします。貴

女に実力があれば、砲を使うかもしれないが……。と言うことです。さあ、行きますよ！」

野分「——っ！ 撃エツ！」

野分の砲撃——だが、そんな一撃はもちろん彼女に当たる筈もなく。

——その爆音を合図に、不知火と野分は水上を駆けだした。

野分は後ろに。不知火は前に。

つまりは反交戦。逃げる野分を不知火が追いかける形だ。

不知火「……逃げてばかりでは、いずれ捕まえますよ」

野分「分かっています——っ！」

唐突な状況に戦慄した野分だったが、一瞬で思考を切り替えた。

一撃目は、開幕に合わせたフェイク——無論、狙いすら付けていない攻撃が当たる筈もない。

だが、不知火の初動を遅らせ、結果としてある程度距離を離すことができた。

野分（しかし……姉さんの言うとおり駆逐艦の砲撃は、距離があると効果が薄い。どの道、決めるためには姉さんの方へと近づく必要はある……）

野分（けれど……同じ駆逐艦同士なら、距離が開いても多少の効果はある！）

反転。同時に腰元の連装砲を発射する。完全に虚を突いたはずの一撃を、やはり不知火は即座に回避し更に野分との距離を詰める――

野分「なるほど――趣旨は分かりました」

つまりこの状況下において、野分が高錬度の不知火を倒す手段は一つ。

追いつかれて雷撃の射程に捕まれば終わりだ。だからと言って、こちらから無傷の不知火へと突っ込むのは、無策にも程がある。

――ならば。

野分（姉さんが撃ってこない――この距離の間に、可能な限り姉さんを潰す！ その上でこちらから近接を仕掛けるしかない――！）

野分「掃射――っ！」

即座に状況を理解した野分は、再度連装砲を発射した。毎分10発——艦装化することで更に速度を上げた連装砲の砲弾が、ほぼ同時に不知火を捕えにかかる——！

不知火「ふ——」

——迫る砲弾の雨を前にして、不知火は笑った。

轟音が連続して響き渡ると同時に、水柱が何本も上がる。

水飛沫は野分の元まで届くほど——

けれど——野分の砲弾は、一撃たりとも不知火に当たってはいなかった。

いや、回避するだろうとは予測していた。

——だが不知火は、野分の予測を更に上回り——尚も、こちらに迫る速度を一切ゆるめていかなかったのだ。

野分「……掃射っ！」

相手は初期型とはいえ自らの姉。加えて歴戦の勇士でもある。この程度の弾幕では……。

野分「足止めにすらならないということですか……っ！」

野分の掃射を意にも介さず、着実に距離を詰めてくる不知火。ひたすらに距離を保ちながら、野分は思考を続けた。

野分（考えろ……。この状況で、姉さんに当てる手段——っ！）

野分（無作為な掃射では意味がない。ならば、確実に狙いを付けるか——いや、それでは砲撃のタイミングで避けられる——だったら——っ！）

不知火「逃げてばかりでは、不知火は止められませんよ」

野分「ええ、そうですね——っ！」

振り返りざまの連装砲からの一撃。だが、この程度のフェイクは通用すらない。意外にも、不知火はこちらのフェイクやブラフといった手を看破し、完全に回避してくるのだ。

そういうのは苦手だと思っていたのに。

だから——後一手必要なのだ。

水上を駆けながら、不知火が射線に入る——その瞬間を、確実に撃ちぬく！

野分（けれどこれは砲撃のタイミングが見えすぎる。この距離なら、姉さんは避けられる）

不知火「その程度で……」

野分の予測どおり。急停止した不知火が、迫る砲弾を避ける為に

その場を横に飛んだ——

この時水面が映したものは、

不知火の失望した顔と——野分の勝利を確信した顔だった——

野分「だから——ここだっ！」

野分は満を持して、もう一度砲撃する。

砲撃の先は、不知火ではない。

不知火が回避したその先——！

不知火「——っ！」

それは必中の一撃である。一度の回避行動を取った後、どうしても一瞬の隙が生まれる。

これは、人間でも艦娘でも同様だ。

だから野分は——その位置を予測して、予め砲弾を打ち出しておいた。そこに彼女が来ると信じて、不知火ならばそこに避けると山を張った。

いや、計算したのだ。だからこれはブラフではない。

計算式で生み出した、野分の武器——この一瞬限りの未来予知——！

この一撃を避けることが出来る者は少なくとも深海側には居ないだろう——
彼女はこの一瞬で、そこまで成長したのだ。

——それは必中。判断力を奪われた一瞬を狙う必殺必中の一撃。

通常ならば、決して逃れることは出来ない。そう——

——ここに居たのが、そのわずかな化物でなければ。

不知火「——」

野分「——は？」

無傷で立つ不知火の背後で、再び水飛沫が上がる。

それを見たとき、野分の思考は完全に停止した。

必中の一撃を回避された——いや、それはいい。

当然この必中は野分の一撃が狙った通りに飛んだ場合だ。野分が外しては意味がない。

それに、発動中であれば回避手段もないわけではない。

多少の無理をすれば——回避前にこちらの意図に気づき、強引に旋回したとかであれば、相手の心理が一枚上手だったというだけのこと。

けれど今のはそうではなかった。

不知火は確実に罠にはまっていた。

彼女の初撃の回避地点は、野分が推理した通りの場所に着地をしたのだ。

そして、野分の一撃もまた、これまでの砲撃の中で至高の一撃だった。

当たる前から、直撃確定だと信じるほどに。

——なのに。

その必中の一撃を、

不知火は、まるで当たり前のように、普通に少し顔を逸らして回避したのだ。

その不条理を、野分の思考は理解できない。

不知火「……難しい顔をしていますね。今の一撃は確かによかった。不知火も、避けきれないかなと思つた程度です」

野分「避ける、避けないの問題ではないはずだ！ 不知火姉さんは確かに、あの時私の罠にはまって——！」

不知火「ハマりましたね。完全に虚も突かれた。私の回避先を読んだ上での完璧なタイミングでの砲撃。見事です」

野分（ありえない……）

ありえない、と野分は心の中で何度も呟く。

野分（——そこまで、必中にハマって尚、そんなことが出来るのは……まさか）

野分「まさか、不知火姉さん……撃ちだされた後の弾丸を目で追える——」

野分「いや、それを見てから、判断が出来る……っ!？」

不知火「……む、正解です。さすがは野分」

褒められても、野分には一切喜ぶつもりにはなれなかった。

長距離から落ちてくる砲弾を見るならばまだ分かる。

こちらの砲撃タイミングと射線を図って回避するのも、艦娘であれば可能だろう。

だが——至近距離から飛んでくる弾丸を、リアルタイムで目で追いながら、回避するなんて芸当は、もはや人間の反射神経では決して出来ない挙動だ。

もちろん、彼女達は艦娘ではあるが——

それでも尚、そこに至っている艦娘が何人いるのだろうか。

不知火「質問は以上ですか？
では——訓練を再開しましょうか」

野分「——っ！」

野分「ふざけた……姉だっ！」

4

走り出した不知火に、野分は再び砲撃を開始する。

けれども——避けられる。先ほどのようにフェイク混じりの一撃を複数回試しても、その悉くを避けられる。

少し前の戦闘で、野分は不知火の事を意外にもブラフやフェイクを看破できる目があると考えたが、それはどうにも間違いだったようだ。

なぜなら彼女は——全てを見てから判断出来る。

そして当然のことではあるが……一度撃ちだした弾丸の軌道を変えることはできない。

彼女は種明かしを見た上で回避できるのだから、ブラフなんて最初から意味を成さないのだ。

野分（ジャンケンで常に後出しされているようなものだ……こんなのは……っ！）

心の中で愚痴りながらも、野分は折れることなく、次の手段を考える。

野分（……不知火姉さん。彼女の性能はおおよそ理解できた。

単純な動体視力だけでみれば、紛れもなく化物だ）

野分（あえて弱点を上げるなら、回避性能自体は初期陽炎型の艤装性能に捕らわれること。

つまり彼女が攻撃を視認しても、艤装スペック自体が付いてこなければ回避は出来ない）

野分（例えば空母による多面爆撃。あるいは戦艦主砲が着弾時、周囲に叩きつける衝撃波）

野分（要は範囲攻撃なら、直撃は回避できたとしても、完全に離脱することは出来ないはず……）

——そこまで思考して、

野分は、己の兵装を改めて確認する。

野分（私に与えられた兵装は、艤装付きの連装砲……手持ちの機銃。そして四連装魚雷……。この模擬戦では姉さんも同じ仕様のはず）

野分（爆撃は出来ませんし……この主砲の口径では、直撃でもしない限り側頭部を駆け抜けてようやく脳震盪を起こせるか否か程度の衝撃でしょうね……）

射撃と逃走を続けながら、野分は考える。

機装の性能はほぼ同一。身体能力や戦闘経験は圧倒的にあちらが上。

ならば野分が打ち勝つには——やはり思考で先を取るしかない。

一度目の未来予知は、彼女の真価を知らなかったが故に失敗した。

だが——ならば——

野分（——心理的な罠が無効化されるなら、物理的に回避不可能な一撃を放つしかないですね。全てを回避するあの人相手にそれを成すには……。つまり……。壁をつくる。そして、私の手には機銃が用意されている）

野分（撃沈を狙う一撃であれば、機銃の放射は意味がない。けれど……。足止め程度であるなら……。よしっ！）

決断と同時に、野分は振り向いて足を止めた。

野分「主砲、掃射あ！」

同時に、主砲の雨を降らせる。

以前やったものと同様——いや、それ以上に狙いすら付けていないように見える砲弾の雨。

不知火「不知火を落としたければ——」

野分「貴女を狙えというのでしよう——？ 分かっていますよ」

野分（けれどそれだけでは避けられる——4手先が必要、だから……！）

次の瞬間、驚愕に目を見開いたのは不知火だった。

だがそれも一瞬のこと——即座に回避行動に移る。

彼女が先ほどまで立っていた場所を轟音を立てる銃弾が突き抜けていった。

不知火「機銃……ですがこの距離でその威力では不知火は——」

野分「落とせないでしょうね。それでも足止め——当たりがよければ、

小破程度なら追い込める——！ そして——！」

再度の轟音。水柱が何本も立つ。

主砲と機銃、範囲も速度も距離も違う二つの攻撃方法による多面攻撃……！

不知火「考えましたね……では採点しましょうか」

再び不知火の進軍が始まる……しかし、彼女の動きは以前よりもやや鈍り始めていた。

機銃の毎分の連射回数は、当然ながら主砲を大いに上回る。

いくら不知火といえど、真の意味での銃弾の雨を完全に避けて進むのは難しい。

——だが、それでもなお。彼女は無傷で進軍していた。

多少かすめるものもあるが、それもかすり傷程度。ただでさえ威力の弱い機銃だ。直撃がなければ当たらないも同義だろう。

そして主砲の方とは言えば、やはりこちらは完全に避けきつている。

回避の重点を機銃に奪われながらも、時を止める不知火の瞳は、全て避ける。

霞に向けて撃っているようだ、野分は思った。

野分（まさに夜の蜃気楼——これが夜戦であつたなら、不知火姉さんの姿は霧のようでしょう）

野分（ならば——その実態を浮き彫りにする。その為の手段は私にはあるっ！）

一方で——対峙する不知火は野分の攻撃に違和感を覚えていた。

主砲と機銃による多面攻撃。確かに不知火の動きを制限しているが、それだけだ。それでも尚、不知火は避けきって野分へと近づくだらう。

そもそも、主砲の何割かが、不知火にちゃんと照準が合っていない。この雨で不知火を討つ気なら——主砲は全て不知火を狙う筈では——

そこまで考えて——不知火は考えるのをやめた。

どちらにしても。彼女は野分が一挙一動を、後出しで見ることが出来る。

野分が思考の粋を尽くして、その不知火を超えていくというならば、その採点をするのが彼女の務めだ。

不知火「さあ……これでは不知火は止められません。ここからどうするのですか？」

野分「無論——貴女を落としますよ！」

機銃掃射を回避する不知火の耳が、都合四度の主砲発射音を捕える。

二つは上空。もう二つは発射直後。どちらも着弾地点は不知火から多少ずれている。

そこに再び機銃と主砲の掃射が襲い掛かる。

そのすべてを回避して——野分と視線を交わす。

そう、機銃を構えながら主砲の照準を不知火に合わせている野分を。

不知火「回避を——っ!？」

不知火の——動きが止まる。何故ならば回避する先などないからだ。

不知火「動きを縫われた——もう一度——っ!?! しかも……」

何かを言いかける不知火の目に機銃が火を噴くのが見えた。

飛び交う弾丸の一挙一動を追いかけ、全てを回避していく。

だが、そうして彼女は野分の選んだ場所に入らざるをえなくなつた。

野分「あなたが、全てを見てから回避できるといふならば。

回避できない攻撃を行えばいい。それをするにはこれしかない——っ!？」

一撃目の砲弾がくる。

それは、不知火であれば確実に回避できる——だから、問題はその後だ。

砲弾を回避した先に、既に砲弾が確実に待ち構えているとしたら——!

——それは砲弾の壁。

機銃から打ち出された弾丸。不知火が無意味だと思つていた、何割かの「不知火に照準を合わせていなかった」砲弾が今、不知火の行動範囲を制限している。

不知火が回避をすれば、回避した先にも砲弾が落ちてくる——「例え何処に回避しようとも」だ。

野分（あなたは、例えどれだけ完璧に虚をついても回避してしまう。——ならば、それよりも更に一手先……っ！ 私が読んだ未来に対して、更に虚を一つ張る——それが……！）

時を止める不知火の眼には砲弾と銃弾に囲まれた己の姿が見える。

そして、野分が一撃を打ち出そうとしている姿も、そこから発射される砲弾の軌道も、確かに見えている。

だが、それを回避すれば、別の砲弾に直撃することになる。

コンマにすら満たない時間。不知火だけが見える筈のその瞬間。

わずかでも時が進めば、水柱となって消えていくだけのもの——だがその一瞬だけは、

彼女の周りの弾丸の雨は、不知火を捕える檻として機能していた——

野分「これで、捕えた——っ！」

心からの期待を込めて、不知火の目の前で、野分の打ち出した砲撃が爆発した。

同時に、撃ちだした砲弾が彼女の周辺で着水し、水柱を立ちあげる。

……水の壁と、白煙の中——野分はその光景を、見ていた。

野分（やった……？）

白煙がゆらりと、陽炎のように消えて――

不知火「大したものです」

野分「――」

不知火「一秒未満を見据える不知火を捕える為に、一秒未満でしか成立しない檻を張る。……発想も、それを可能とする実力も。本当に大したものだと思います」

野分「なん、で……」

5

不知火「——おかげで、私も砲を抜かざるをえなくなりました。近接するまで抜く気はなかったのですが」

蜃気楼のように——白煙の中から——けれども確かな威圧感を持つて。

背の主砲に指示を出すように、片手を前に突き出して。

不知火はそこに立っていた。

野分「どうして、無事なはず……、いえ、無傷なはずがない……っ！ あの一撃は確かに直撃だった……、回避も防御も姉さんの艦装性能では不可能なはずでは……」

不知火「そうですね。だから、撃ち落としたんです」

野分「は——？」

不知火の動体視力が並外れているとはいえ、彼女の身体能力や艦装では、回避も防御も不可能だ。

——だから、撃ち落とした。

体勢を崩したまま、己に向けて飛んでくる砲弾を視認して、同じように主砲からの一

撃で相殺したと、彼女はそう言ったのだ。

そんな不条理を、不知火はこともなげに告げる。

不知火「……ですが、まさかここまでとは思いませんでした。最初から砲を撃たない、なんて格好付けない方がよかったわね」

不知火「……でもあなたは不知火に砲を使わせた」

不知火「心配せずとも、最低限以外は撃たないようにしますから。今度はそれをハンデイとしましょう。……さあ、不知火に一撃を入れてみてください」

不知火「不知火——砲雷撃戦を開始します」

野分（……っ！ さすがに、勝てる気が……っ）

背後に移動しながら、轟音と共に主砲を撃ちこむ野分。

せめて水柱でも不知火の行動を制限する——！

だがそのもくろみは、再びの轟音の後、当然の如く霧散した。

野分と不知火の間の空間で爆発が起きる。爆風に目を細めながらも、野分は今起きた状況を理解する。

野分（やつぱり、主砲を、途中で撃ち落とした……。そんなのは……っ！）

装填が終わると同時に野分は主砲を水面に向けて撃ちこんだ。至近弾による衝撃波が、不知火と野分の間に生まれる。

野分（——っ！）

その隙を待って、野分は全速力で不知火から距離を取った。

野分（速度は同じ——だから直線を走る限りは追いつかれない——けれど、主砲が飛んでくる可能性もある——いつまでも逃げているわけにはいかない。

いや、だからといって……）

野分（落ち着け……考えろ。私に出来るのはそれしかない。でも——）

必中必殺。確実にやったと思った、『砲弾の檻』ですら、あの不知火は避けきった。

あの一撃をもう一度やるには、弾薬の数が心許ない……なによりも、今の不知火は砲を抜いている。

「砲弾を打ち落とす」ことが出来る相手に、今一度あの技は決まらない……っ！

野分（いや……でも、これはチャンスだ。これまでの姉さんはただ私を追いかけているだけだった。……多分雷撃の射程に入った瞬間に攻撃するつもりだったのだろう。

私も姉さんも魚雷の射程は同じ……だから、雷撃戦は完全な早打ち勝負……）

動体視力で姉さんになわなない以上、万全な状態で撃ちこんでくるつもり姉さんと雷撃勝負は無理だ）

野分（けれど今は姉さんも主砲を撃つてくる。——つまりこれまでにない攻撃の隙が生まれる。だから——雷撃戦に突入するときにも、こちらの手を入れることが出来るかもしれない——っ！）

距離を取った野分は、不知火の方へ向き直る。

不知火は——元の位置から動いていなかった。

まるで、野分を待っているように——

野分「……………」

野分（違う……か。どの道、砲撃戦でも不知火姉さんにはかなわない。

なら、雷撃戦で敵う道理もない……それなら、私に出来るのは1つだけ）

野分がゆっくりと距離を詰めていく。

そして、不知火とある程度の距離で、ぴたりと止まった。

それは二人の雷撃の射程範囲限界。

あと一步踏み出すだけで、野分は不知火の射程に入る。

——だが、それは自分も同じことだ。

ここより先は死線だと意識する。

一呼吸をして、魚雷を艀装へと装填する。

不知火は4装。野分も同等の数を装填できる。

——彼女は左手に持った魚雷を全て装填し。

早打ち勝負では敵わない——だから。

野分「——つてえ！」

弾丸を装填した主砲を一撃打ち出すと同時に、野分は一步、踏み込んだ——

無論、その程度の一撃は中空にて打ち落とされる。

不知火「——」

野分「——」

ほぼ同時——いや、わずかに不知火の方が早く、装填した魚雷を一斉に解き放つ。

そして野分は——己の発射した魚雷のすぐ後ろを、駆け始めた——！

野分（これが正解だ……！）

魚雷には二つ弱点がある。一つは他の砲撃と同じ……一度打ち出した後は方向を変えられないこと。そしてもう一つは……平面的にしか行動できないこと！）

野分（不知火姉さんの雷撃は、早さも正確さも一流——だから、必ずこの軌跡を通ってくる——そこに魚雷を打ち出せば——！）

野分の目の前で爆発と共に水飛沫が舞う。それをも無視して、更に野分は歩を進める——っ！

都合3度の爆発の中を、全速力で野分は駆ける。

最後の水柱を超えると同時、爆音が二回、続けて聞こえた。

一つは——野分の主砲。完全に大破して、もはや使うことなどできないであろうもの。
の。

そしてもう一つは——野分の主砲と全く同じ状態で碎けた、不知火の主砲から。

野分「やつぱり……不知火姉さんなら、ここで撃ちこんでくると思いました」

不知火「そう。そしてあなたは、破壊されるより前に私の主砲にも同じことをしたのね。……それで？」

野分の進軍が止まる。

お互いに残る艦装は、空の雷装と機銃だけ。

主砲は完全に痛み分けとなっている。

雷装を再装填するには、致命的な間が空くだろう。

距離はこれまでで最も近い。

だが、これが駆逐艦の戦闘距離だ。戦艦の装甲すらも無視して、敵となぐり合うための距離。

これこそ、かつて駆逐艦が栄華を飾った夜戦時代の距離であり……。

野分「——来ました、姉さん」

不知火「——来たわね。野分」

交わした言葉は同時——放った銃弾もまた、同時だった。

野分の機銃攻撃を不知火はやはり動体視力だけで回避した。この距離でなお避けきれぬのかと驚愕する野分に不知火は更に距離を詰める。

野分「……………っ！」

再び機銃を構える彼女の腕を、下から不知火が、同じ機銃をもって打ち上げる。銃口は互いに空を向き、野分の銃口からあらぬ方向へと銃撃が飛んだ。

不知火「はあっ！」

不知火の蹴りが野分の腹をかすめる。——距離を取られた！と野分は瞬時に理解した。

不知火「……………」

とつさに横へと転がり滑る野分。一瞬前まで彼女のいた場所を、銃弾が駆け抜けていく。

不知火の機銃が更に追撃しようとして下を向く。——だが、その瞬間を待っていた。

野分「ふっ——」

野分の機銃が、不知火の機銃を弾く。今度は野分が照準を合わせる。だが、それもま

た不知火の機銃に払われる。そして銃声。

今度は完全に読み切っていた野分が、横に抜けるように彼女の腕を取りながら回避した。

不知火「ここまで来たから、あくまで個人の武で戦うつもり？ それなら……っ！」

野分「——っ！」

野分の顔面に裏拳が飛んでくる——ただの裏拳ではない。

機装——すなわち使えなくなった主砲を使った裏拳だ——っ！

野分「くっ——！」

たたらを踏んで後退する野分。

不知火は魚雷を取り出して、再び雷装を装填しようとしている。

この距離で雷撃を喰らえば、野分に防ぐ術はない——！

野分「させ——るか！」

動体視力と判断力。その全てを集中して、彼女の雷装を機銃で撃ちぬいた。

これで雷装は使えない——だが——っ！

不知火「——射線を外しましたね」

——野分のすぐ真横から、静かな声が出た。

とつさに手を引くがもう遅い。

彼女の腕から機銃は既に叩き落とされて波の上。

そして、不知火の機銃は——まだ彼女の腕の中に——

野分「——」

この瞬間——彼女の手には兵装はもはやなく——そして、不知火の手には機銃がある。

勝負は確定した。駆逐艦同士の戦い……密着しての純粹な技量による殴り合いにおいて、

野分が何の策もなく、鍊度の高い不知火の前に、勝てるはずはなかったのだ。

不知火「けれど——貴女はよくやったほうです。きつともう一度あれば」

不知火の銃口が、野分へと向く——

これにて戦いは決着する——そう、野分に何の策もなければ——！

野分「勝負を、確定させましたね。姉さん」

不知火「——っ！」

とつさに機銃の引き金を引くが、野分はそれを回避した。

撃つなら、このタイミングであろうと予測していた。

それは最初に見せた、推理による未来予知——！

不知火「だが——どうするのです。もう兵装はない——どちらにせよ——！」

不知火の言葉は真理だ。

例え最初の一撃を回避できたとして——この距離で機銃を持った不知火に敵う筈がない。

いや——例え不知火の方も完全に兵装を失っていたとしても、この距離では勝負にならないだろう。

それは、野分に兵装が無ければの話。

不知火「——」

不知火が、今度こそ野分に一撃を決めようと、機銃を野分へと向ける。

もはや言葉もいらぬのだろう。あるいは聞こえていないのか。

今の野分には一秒がやたらとゆっくりに思える。

——なるほど、これが不知火姉さんの見ている世界なのかと、今更に関係の内容な事を思った。確かに、これなら弾丸くらいは避けられそうだとふと笑う。

不知火「——」

不知火の銃口が向く。後は引き金を引くだけか。

いや、まだだ。野分が引き抜いたのは——まだ壊れていない野分の雷装——！

そして、そこに装填されていた。

一発だけ、撃ちださなかつた野分の魚雷——！

不知火「まだ……残して……っ!」

野分「あの手段なら、私があえて全発撃ちぬく必要もありませんでしたからね——!」
賭けではあった。魚雷をどうせ全て誘爆させるのであれば、一本くらい残していても問題ないのではないかと野分は判断した。前方の爆風を見れば魚雷の距離は読める。既に自分に向けて射出されたものであれば、方向は変わらない。

だから、最後の一本だけは、回避するつもりだった。

……それでも、最悪の場合、一発喰らう可能性もあったが。

とにかく、そうでもしないと勝てないと判断した。

野分「——っ!」

雷装の再装填は、この瞬間では致命的な隙を生む。

……だが、既に装填されていた魚雷を引き抜いて手で握る分には、何も問題はない——っ!

不知火「——」

ここで初めて、不知火は迷った。

野分を撃つべきか、雷装を壊すべきか——いや、引き抜かれた魚雷を破壊しなければどの道——そもそも、彼女はこうして魚雷を素手で——

野分「この距離なら——雷撃よりこうした方が確実にしようっ!」

不知火「――」

不知火が、答えを出す――とにかく野分さえ撃てば終わるといふ事実気づくのと、野分の手にした魚雷の先端が、不知火の首筋を捕えるのは――ほぼ同時だった。

不知火「……この距離でそんなことをすれば、貴女自身も巻き込まれるでしょうに」

野分「いや、多段式の信管ですから、上手くすれば、逃げられるかなって……」

不知火「……はあ。仕方ありませんね」

不知火は機銃を下すと、両手を上にあげた。

不知火「降参、です」

野分「——え？」

不知火「ここまで来て、まだ一手残してくるとは思いませんでした。

……直感頼りの不知火では完敗といったところでしょうか」

野分「で、では……!?!」

不知火「——陽炎型駆逐艦15番艦、野分」

不知火「貴女の改装を許可します。提督に連絡の後、工廟に向かうこと」

野分「……あ、ありがとうございます！」

不知火「いいえ……こちらこそ、ありがとう」

不知火「これまで陽炎型の妹達で私の演習を超えた人、いなかったから。これでやっと、陽炎に怒られずに済むわ」

不知火「おめでどう。あなたが、不知火を超えた陽炎型駆逐艦、第一号です」

野分「は、はあ……、まあ。そうでしょうね」

不知火「陽炎型に限らなければ、不知火と個人演習という名の肉弾戦をして勝利した駆逐艦は何人かいるけど。性能差、錬度差によるものだから」

不知火「……あなたみたいにな、あの極地でなお、策で不知火を討つたのは、あなたが初めてです。それを、誇りなさい」

野分「ちよつと、汚い勝ち方かなとも思うのですが」

不知火「戦に汚いもなにもありませんよ。……特に、不知火達駆逐艦は、自分よりよほど巨大で、強大な怪物を相手にするのです」

不知火「貴女のような艦も、いた方が良いでしょう」

野分「そうだと、嬉しいですけど……」

不知火「……それは、誰かを守る力になると思います。

大切な人を、守る力をあなたはもう得ているはず」

野分「……………っ！」

不知火「艤装性能はどうしようもない。錬度は後から付いてくるもの」

不知火「……けれど、あなたは自分の持てる力を全て使い、不知火から勝利をもぎ取った。それが事実で、全てです」

不知火「まだ、なにかありますか？」

野分「ですが、私はまだ……たっ!？」

不知火「そういう、自信が無いみたいな顔はやめてください」

不知火「これ以上、不知火に自分が負けた理由を説明させるつもりですか？ 案外、意地悪なんですね、野分は……」

野分「す、すいませ……そんなつもりではっ!」

不知火「冗談ですよ……ふふ。そうね」

不知火「お祝いに、なにか……ご飯でもおごってあげます」

野分「はい。……ありがとうございます」

不知火「どういたしまして」

END.